

式 辞

三石山（さんごくやま）のふもとに広がる校庭には、どの花よりも真っ先に咲くことで「百花（ひゃっか）の魁（さきがけ）」と呼ばれる「梅の花」が咲き誇っています。春の訪れを感じる今日の佳き日、PTA会長様、同窓会長様、そして、保護者の皆様のご臨席を賜り、兵庫県立播磨特別支援学校 第五十二回 卒業証書授与式を挙行できますことを、心から感謝申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与いたしました39名の卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは本校のすべての教育課程を無事修了し、めでたく卒業の日を迎えることができました。三年間よくがんばりました。本校を代表して、心から祝福の意を表します。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。

さきほど、卒業証書を受け取るお子様のお姿をご覧になり、感慨もひとしおのことと存じます。心よりお喜び申し上げますとともに、高いところからではございますが、この場をお借りいたしまして、これまで本校にお寄せいただきましたご支援、ご協力に謹んでお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

さて、39名の卒業生の皆さん 本校で過ごした3年間は、本校にとっても社会にとっても大きな転換期のまっ只中にあったと言えます。

本校の歴史では、前年度に創立50周年行事を終え、100周年をめざし新たにスタートした平成30年4月に皆さんは入学しました。校訓の「自立、友愛、創造」の精神を継承し、一年生の学校生活が始まりました。新しい出会いの中、無我夢中に過ごした一年間だったのではないのでしょうか。

平成31年4月1日、新しい元号が「令和（れいわ）」に決定と発表があり、世界中に「Reiwa」とは「Beautiful Harmony（美しい調和）」を意味すると発信されました。それから、一週間後の4月8日、前期始業式を迎え、二年生になった皆さんは、自分たちが「令和」という新時代を担い、未来に向かって生きていく世代であることを意識したことと思います。

学校生活も充実した二年生。「自立」に向かい、学科やコースでの学びを深め、検定や資格取得、販売実習や職場体験実習に前向きに取り組みました。

そして、令和元年度の修了式が目前にせまった頃、世界中を震撼させたのが新型コロナウイルスの感染拡大（パンデミック）の脅威でした。

学校は、最初の緊急事態宣言のもと、臨時休業が続きました。延長措置等もあり、分散登校を経て、学校が完全に再開したのは7月になりました。三年生として学校生活集大成の年、体育祭の中止、楽しみにしていた修学旅行も中止、文化

祭は文化発表会とし、規模縮小での開催変更をお願いし、例年通りの学校行事はほとんどなくなりました。

皆さんの健康を第一に考えての判断で、やむをえないこととはいえ、卒業生の皆さんにはつらい思いをさせて、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

そのような中でも、毎日皆さんが登下校時に交わす挨拶には、いつも元気をもらいました。挨拶で心を通わす本校の「伝統」を示してくれたことには感謝の思いでいっぱいです。

さらに、学習場面では、「集中力」を発揮し、「刹那（一瞬・瞬間を大事）」に努力する力を示してくれました。電子黒板を見て学ぶ姿、製作実習では丁寧に仕上げる姿、作業工程を正しく説明する姿、各種検定・資格取得に挑む姿、グラウンドを懸命に走る姿、そして、就労をめざし企業実習に臨む姿には3年生としての自覚が随所に見てとれました。さらに、圧巻だったのは12月に行われたマラソン大会で全員が完走したことです。

卒業生の皆さんが本校で過ごした平成30年、令和元年、令和2年はまさに激動の3年間だったと思います。

コロナ禍にあって思い通りにならないことも多く、当たり前がそうではない状態などが続く中であっても、自分を見つめ、自分を見失うことなく、自身の将来を切り拓き、本日卒業の日を迎えました。

本校を巣立っていく皆さんは、在校生の後輩たちにとっては、まぎれもなく一歩先を行く先駆者（パイオニア）であり、一足先に、令和という新時代を担って活躍される立派な先輩（リーダー）でもあります。

冒頭の言葉、「百花の魁」にもどりますが、梅の花は寒さ厳しい時に多くの花の先頭をきって開花し、春を告げると言われています。他の花々も梅の花に続くかのように咲き始めるそうです。このことにあやかって、本校旅立ちの今日、母校には白梅と紅梅が咲き誇っていたことを胸に、社会にはばたく魁（さきがけ）として自分自身の姿と重ね合わせ、堂々と未来への第一歩を力強く踏み出して行ってください。

ご来賓の皆さま、保護者の皆さまに重ねてお礼を申し上げますとともに、卒業生の皆さんの将来に幸多かれと願い、式辞といたします。

令和三年二月二十六日

兵庫県立播磨特別支援学校
校長 下雅意 一之